第24回小野十三郎賞受賞者インタビュー

受賞者・**宮内喜美子**
聞き手・**細見和之**

細見　『わたしたちのたいせつなあの島へ――菅原克己からの宿題』で小野十三郎賞の特別奨励賞を受賞されました。まずは受賞されてのお気持ちはいかがでしょうか。

宮内　すごく嬉しいです。どうもありがとうございます。じつは今回は三度目のノミネートでした。二十何年か前に初めて思潮社から詩集を出したときに、小野十三郎賞にノミネートされて、びっくりしました。最終候補には有名な詩人が並んでいらして。中には、なんと吉増剛造さんもいらして。信じられないですよね。あんなすごい詩人と一緒に並べていただけるなんて……。それで私は当然の落選、というか、吉増さんとご一緒に名誉の落選？　をしたということがありました（笑）。おかげで、私の書くものもそれほどひどくはないのかもしれない。といい気になって、書き続けてこられたところがありました。

細見　小野賞最初期ですね。そのときは詩集を出されたのでしたね。

宮内　『わたしはどこにも行きはしない』という、おもにニューヨーク在住中に書いた詩をまとめた詩集でした。でも、その後に送られてきた「樹林」に選考委員の方々の選評が載っていたんですが、どなたも私の詩に触れられていなくて。それですごく落ち込みました。……ああ、きっと先生方は、これは語るに足りない作品だと思われたか、あるいはものすごく酷評されたので、編集部の方が気の毒に思って削除してくださったのか……などネガティブにいろいろ考えてしまいました。

細見　選考会の場では最終的に更に絞りこんで議論していきますから、最終的に議論した作品について書く場合が多いですね。

宮内　去年も詩集『神歌（ティルル）とさえずり』を候補にしていただいて。今度は三度目で、奨励賞でした。それが、二十何年か前に、どなたも一言も発してくださらなかったことへの私の疑問に対する、お答えのような気がして、小野十三郎と菅原克己が空の上から「まだまだだけど頑張れよ」と言ってくれているようで、とても嬉しかったです。

細見　今回の宮内さんの作品、詩評論書として見た場合に、かなり特殊だと思います。なんといっても、ご自分の作品がかなり入っている。アンソロジー的な側面もある。でもその詩が批評文と重なったり合わさったりしながら、一つの批評の世界を作っている。読み返していて、こういう詩評論書もありだなと思った。よくあるのは、個別の詩人についてのアカデミックな研究です。細かな伝記関係と先行研究を踏まえたものですね。それから小野さんの詩論はちょっと独特じゃないですか。難しいアフォリズムが重ねてあって、自分の考えをひたすら綴っている。私たちも小野賞の詩評論をどう考えたらいいか問い続けている。宮内さんの作品は、その点で新鮮でもあった。博士論文をまとめたものとはまた違うものを小野賞は一方で求めているという合図にもなるかという感じがしています。

宮内　そのようにお考えいただき、捉えてくださって、ありがとうございました（笑）。

細見　詩評論でも詩に対する情熱が一番大事なので、それをすごく感じたんですね。

宮内　応募するときに、詩集として応募したいなとも思ったんです。「日にひとつの詩」というタイトルで六篇の震災直後の詩、ほかにも二、三篇ありますので。でも、それにしてはエッセイの部分がかなり多いですし、本でも詩集とは銘打っていません。といって、もともと評論というのは最も苦手な分野で、勉強不足、実力不足は重々自覚していて、そういうレベルのものではないと思っていましたから、曖昧な形で応募してしまいました。そうしたら、詩評論書のほうでノミネートされたというお知らせをいただいたので、びっくりしました。最終候補の皆さんの作品を見

ると、それこそアカデミックな感じできちんと研究されているものなので、「あ、こりゃあかん」と。ノミネートしていただけただけでも、すごくありがたいと思っておりました。

私家版で出した第一詩集

細見　そういうアカデミックな研究書もやっぱり大事な対象になるんですけど、そればっかりではないよなという気持ちもあるんです。そういう点でこういう作品を挟み込みながら、菅原克己論をひとつ貫かれているところが印象深かったです。なかにチラッと出てきますけど、二十歳ぐらいのときですか、最初に私家版みたいな詩集を作られたのは。

宮内　はい。十九歳だったでしょうか。

細見　そのときはとくにサークルとか関係なく自分で書かれていたんですか。

宮内　自己流で勝手に書いていました。高校生の頃からノートに時々書いていましたが、いろいろな詩人の詩集をきちんと読んだこともなくて。国語の教科書に出ている詩を読んでいたくらいでした。

細見　こういうひとの詩が載っていたと覚えていらっしゃる詩人ありますか。

宮内　「からまつの林を過ぎて」の北原白秋とか、あと高村光太郎の作品とかですね。

細見　宮内さんは僕より十歳ぐらい年長だから、学校での教科書も十年ぐらい古い。

宮内　萩原朔太郎の「竹が生え、…竹が生え、…」とか、草野心平の「るるるる……」と「る」が並んでいる詩とかがあったでしょうか。

細見　僕のときも朔太郎、草野心平は載っていましたね。高村光太郎もあったかな。

宮内　でも、私はどちらかというと小説のほうが好きで、高校の図書館の現代文学の棚に通っていました。武田泰淳、福永武彦、大江健三郎など手当たり次第読んでいて。大江健三郎の『万延元年のフットボール』が新刊であって、とても難しいのに夢中になって読み、なにか突き動かされるように感動したことを憶えています。それから短大では美術系の学科で、当時版画家の池田満寿夫が脚光を浴びていて、その彼女が詩人だと知って、はじめて自分で買った詩集が現代詩文庫の『富岡多恵子詩集』で、それが私の現代詩との出会いでした。その言葉の魅力に惹きこまれ、ぐいぐい読まされていくうちに、なんだか自分にも書けそうな、そんな気にさせられました。良い詩ってそんなふうに、読む者を書ける気にさせる、書かせてしまうものなんですよね。といって、じつはそう簡単に書けるものではないんですけど。久しぶりに現代詩文庫を再読して、わからない？！　難解さに驚きました。やさしい日常語なのに、不思議な飛躍感があり、投げやりに偏光する詩行。背景に薄くかかる死のヴェール。寂寞感……。詩人論を書いている明治生まれの森茉莉さんが親愛にあふれる文章の中で「わからない」とおっしゃっていますが、いまの私にも難解です。半世紀前の私にいったいなにがわかっていたのやら。訊きに行ってみたいです。きっと若かった私はずっと尖っていて、アンテナの感度がよかったんでしょう。その富岡多恵子が詩を見せに行っていた先生が小野十三郎だったんですよね……不思議なご縁というか、いまでも私の書くものに、見えないところで強い影響が残っているのかなと思ったり。富岡多恵子の詩に衝撃を受けた私は、とつぜんたくさんの言葉を書き始めて、その勢いで一冊の手作り詩集を作ってしまいました。

細見　その私家版の詩集を新宿で売っていらしたということですが、製本とかされていたんですか。

宮内　いえ、ガリ版刷りホチキス留め。時代を感じますよね。夏休みの家出中で、学校の学生会室に謄写版があり、学生会長が友だちだったので潜り込んで勝手にプリントして。それでその詩集を新宿で売っていたら、たまたま通りかかった宮内が買ってくれたんです。

細見　その詩集にインドのことが書かれていたから、勝典さんが自分のインド体験を重ね

て読まれたんですね。宮内さん自身はその時点ではインドに行かれてなかった。

宮内　行ったことはなくて。サタジット・レイ監督の『大地のうた』という映画が当時公開され、すごく感動しました。モノクロ映画で、ただサトウキビ畑が風に揺れ、雨がザーッと降ってくるシーンとかに心を揺さぶられて。主人公の少年の名前を借りて「オプー、あなたと会う」という詩を書きました。それを読んでくれた彼がいろいろ解釈してくれて。

細見　それはそれですごい出会いですね。

宮内　オプーを、オプティカルのオプとか、オプティミズムのオプから取ったんだろうとか。私にはそんな深い考えはなかったのに、そんなふうに良い方に深読みしてくれたらしくて、いいと思ってくれたようで。いま思えば、映画を作った人はそう考えて主人公の名前にしたのかもしれませんね。インドの人たちは英語が堪能ですから。

細見　そこでもう親しく話をされてたんですか。十九歳とか二十歳とかで。

宮内　そうですね。彼はアメリカに四年滞在後インド経由でちょうど日本に帰ってきたところで。インドの話とか、詩人の山尾三省さんのこととか……。新宿の紀伊國屋書店のエスカレーターが一階の街路に向けて設置されているところがあって。閉店後、そのあたりに座り込んで売っていたんです。そこに毎日のように顔をだしてくれて。

細見　僕のイメージでは新宿というと駅構内とかの感じですけど、紀伊國屋書店のところ。

宮内　まったく図々しいですよね。すいませんでした。それで、そのときは家出中なのに、詩集の後ろに住所が載せてあって（笑）、ほとぼりも冷めて、家に帰って、ちょっと落ち着いていた頃に、宮内から電報が届きました。山尾三省さんの家の茅葺屋根に穴があいて、雨漏りがして、畳からきのこが生えてしまった。修理するのでいっしょに行きませんか。というすごいデートのお誘いでした（笑）。

細見　そのときは美術学校在籍中ですか？

宮内　美術学校といっても短大の生活芸術科というところで。まだ在学中でした。

私の出会った菅原克己

細見　その後にこの本のテーマの一つになっている、菅原克己さんとの出会いがありますね。でもこれも、宮内勝典さんが先だった。

宮内　彼はやはり私にとって、人生の大切な扉を開いてくれた人ですね。出会ったとき彼は職探し中で、しばらくは定職もなくて。でも結婚することになって、そのためには働かなくてはならない。それで、知り合いの伝手で、小さな、社長と彼しかいない出版社に勤めはじめました。宮内は肩書きだけは「南方熊楠研究編集長」（笑）。社長は詩の雑誌を計画中で、詩人たちがよく集まるバーに彼も一緒についていったときに、菅原克己と出会って、「なんかすごくいいおじいさん詩人と出会ったんだよ。こんど彼女と遊びにおいでと言われたから、いっしょに行こう」と。

細見　おじいさんといってもまだ五十代ですか。

宮内　六十歳になられたばかりの頃かと。

細見　菅原さんてすごく親しみを感じている人が何人もいますね。大阪文学学校で事務局長をしていた高村三郎さんは、岩手の中学校を卒業して東京へ出てきて、夜間高校へ通ったり辞めたりしていた時期に、菅原克己さんと親しくしていて、その頃は詩も書いていたようですが、こっちへ来てからは長い小説を書いていました。二〇〇〇年ぐらいに亡くなっちゃったんですけれど、すごく菅原さんには世話になって、菅原さん、子供がいないじゃないですか。だから「養子になるか」みたいに言われたって言っていました。他にもそういうふうに声をかけられた人いるんじゃないかと思いますが（笑）。

宮内　そうなんですよー（笑）。「なんじゃもんじゃの木」という詩について「この詩は君たちのことを書いたんだよ」って私におっし

ゃったんですけど、菅原さんのいい写真をたくさん撮っていた青塚満さんが「あの詩は僕たちのことだ！」と怒っておっしゃって（笑）。ダブルイメージだったんだと思いますが。仲人も何十組もされたんですよ。

細見　すごいなあ。

宮内　ほかにも「我こそは菅原克己の息子である」みたいに自認している人がいて。敬愛されていました。ただの文学の先生ということ以上に、人生の師とか、大事な親のように親愛感を持っている人が多いですね。

細見　宮内さんも菅原さんの「P」という雑誌に同人で加わりますよね。合評会のとき菅原さん、どんな感じだったですか？

宮内　今から思うと、私はけっこう褒めてもらっていましたね。男性陣にはかなり厳しかったようですが。亡くなられた後、偲ぶ会のげんげ忌で集まったりすると、男の人たちには、「俺には厳しかった」、「厳しかったし、怖かった」とおっしゃる方が多い。特に、詩に政治や社会的な思想が強く出ていたりすると、諌められることが多かったと思います。

「P」の合評会の思い出

細見　「P」には女性もたくさん参加していたんですか。割合的にはどうですか。

宮内　半々くらいでしたね。バランスはよかったです。私がはじめて行った頃は、合評会にはトータルで十人もいませんでしたが、その後、新宿区の公会堂の会議室を借りて、二、三十人集まっていたときもありました。

細見　七〇年代の半ばから後半、八〇年代にかかるぐらいですか。

宮内　そうですね。結婚して初めての子を出産後に亡くしてしまい……、私はすごく落ち込んで、ちょっと精神的にも参っていたときに、宮内に背中を押されて。七六年だったか、行きはじめました。その後は無事に生まれた子どもを連れて合評会に行ったこともあったんですが、八三年に家族でアメリカへ転居してしまって。ニューヨークからも「P」に作品を送っていましたが、先生は入院され、八七年、一時帰国した際にお見舞いができて、……八八年に亡くなられてしまいました。

細見　「P」の集まりはどれぐらいの頻度であったのですか。月一回ぐらいありましたか？

宮内　結構頻繁でしたが、昔のことで忘れてしまいました。

細見　みんながそれぞれ作品を持ち寄るんですか。

宮内　合評会は「P」が出た後だったかと。それぞれの作品が載っているので、では次は誰々の詩を、と。皆がしばらく沈黙してその人の詩を読んで、意見を言い合う。で本人が弁解したりですね（笑）。

細見　じゃあ掲載する前には特にやらなかったんですか。

宮内　そうですね。ということは、私の知らないところで、編集作業などで集まってくれていたんですね、きっと。

細見　みんな作品を出して、掲載作は菅原さんが決めてたんですか。誰か別に担当の人がいたのかな。

宮内　その時々中心になって、先生と一緒に編集される方がいたと思います。私が入ったときは阿部岩夫さんだったでしょうか。菅原先生がどこらへんまで主導的に編集されていたのかは、わかりません。

細見　とりあえずみんなが作品寄せて、雑誌を作って、出た後に合評会という形で勉強会をやっていた。合評会のとき菅原さんはみんなの意見を聞いているんですか。

宮内　皆さんが言うことをちゃんと聞いていて、最後に先生の番なんですけど、やはり、それぞれに的確なことをおっしゃいました。

細見　宮内さんの本に出てきますけど、「君の気持ちを素直にそのまま書いたらいいよ」というようなことを菅原さんは言われる。僕もさっきの高村三郎からそう言われたと聞いたことがあるのですが、それがじつは詩では

いちばん難しいですね（笑）。

宮内　そうなんですよね。

細見　宮内さんに同じことを書かれたときに、カッコ書きで「ぼくは別ですが」と記されていた。面白いなあと思いました。

宮内　「詩は正直に、はたを考えずに、思うまま書くことがだいじなんですよ。それが、すべてのすぐれた詩人の道です。」と私には書いてくださって、そのあとにカッコして（ぼくは別ですが）とありました。それを見るたびに、ほんとうに胸に抱きしめたくなります。先生は生涯、自戒の気持ちを持ち続けていらしたんです。正直であるということはほんとうに難しい。正直といっても、心の中では様々な思いが幾層にもあって、いくつもの記憶もそこに重なっていて、そのとき私はほんとうはこう思ったんじゃないか、そう思いながら実は違うことを思っている私もいたんじゃないか……いろいろ考えると、いったい何がほんとうなのか、何がいちばん正直なのかわからなくなります。

アメリカでの子育て

細見　菅原さん自身の人生も複雑でしたからね、ものすごくピュアな人がいろんな苦労をされていて、素直であろうということも、けっこう大変なことだっただろうなと思いますね。「P」の会に参加されている時期に悠介さんが産まれて、一家でアメリカ合衆国に渡られるわけですね。悠介さんをアメリカで育てたいと思われたのですね。よく決断されましたね。

宮内　やっぱり宮内の意志が強かったと思います。私の両親は健在で、初めての孫を亡くしたこともあったので、次に元気な子が産まれ、すごく喜んで可愛がってくれていたので、それを引き離してしまうのは申し訳ないような気持ちもありました。もちろん私も新天地に行ってみたかったですけど。

細見　すごいエネルギーだなあ。

宮内　子供には過酷な経験もさせてしまったと思いますが、宮内はグローバルに開かれた世界で育てたかったんでしょうね、きっと。

細見　勝典さんの場合は若い頃に何年間かアメリカ滞在されていますよね。だからある程度ことばの問題に自信あったと思いますけど、喜美子さんの場合はやっぱりことばの問題もあって大変じゃなかったですか。

宮内　そうですよー。結婚前に、母が花嫁修業にお茶やお花を習いなさいとか言いだして（笑）。それで彼に話したら、そういうことしなくていいから。同じ月謝出してもらえるなら英会話を習ったほうがいいんじゃないかと言われて。ＹＷＣＡの英会話教室に通ったんですけど、全然上達してなくて。なのにニューヨークでは、子供を小学校に入れるところから丸投げされて。無事に入れてもらえたのはよかったんですが、毎日お知らせのプリントをドバッとくれる。それがみんな英語（笑）。来週は何とかの会だから、これを持ってきなさいとか、ＰＴＡの日時。健康のこと……子どものことなので、理解してみんなとおなじようにしてやらないとかわいそうじゃないですか。必死になって辞書を引きながらがんばって、宿題も一緒に……、それで身についたところがあったかもしれません（笑）。公立校で、親もボランティア参加という方針だったので、折り紙教室を開いたり。

細見　いやあ、すごいなあ。日本人であってもこれから生きていくときにはそういう環境で育って、世界を知っていないといけないという気持ちが勝典さんには強かったのでしょうね。

宮内　子どもをコスモポリタンにしたかったんだと。

細見　なるほど。子供の頃からこうだったら自分はあそこまで苦労しなかったという感覚。

宮内　そうかもしれません。

細見　結局、そのときはアメリカに何年いらしたことになるんですか？

宮内　九年ちょっといました。住んでいたの

がマンハッタンのイーストビレッジという若いアーティストの多い町で、とても活気があり、『ブレードランナー』とか、いい映画がよくかかる映画館もありました。楽しい経験でした。ただやはり危険なので、絶対に何があっても自分の子供から目を離してはいけない。学校の送り迎えも大変でした。

細見　八〇年代から九〇年代にかけてですね。それで、その二〇〇一年の九・一一がありますよね。そのときはもうこちらに戻っていらしたんですね。

宮内　この本にも書いている私の友人は福島の旅館の女将で、宮内はその旅館にこもって長編小説を書いているときでした。東京にいた私は、テレビ画面に一瞬呆然として、それからすぐに電話して「テレビ見て！　大変なことが起こっている！」と言いました。十年近く暮らして知り合いもいる、愛着のある街での事件に、二人ともたいへん深いショックを受けました。

東日本大震災と「日にひとつの詩」

細見　さらにその後、東日本大震災がありますね。そのときにかつて菅原さんがみんなに宿題のように課されていた「日にひとつの詩」の試みとあらためて出会われて、宮内さん自身が遅ればせながら「日にひとつの詩」を実際に試みられる。それがちょうど二〇一一年の三月の初頭から始まったわけですね。

宮内　いつも菅原克己の本を並べている書棚のいちばん端のほうに、薄く入っているんですけど、ふだんは手に取ることもありませんでした。それがふと気になって手に取って見て、その表紙に書かれた「詩は正直に……」の先生の字があって、ああ、ちょっと書いてみようかな、今の私ならできるかもしれないと思って、それで始めたら、三月十日が東京大空襲の日で市内アナウンスで黙祷があり、その翌日に、震災がありました。

細見　偶然ですけれども、後から考えるとそれを想定して書きはじめていたみたいな感じになりますね。

宮内　沈没する前に鼠が船から逃げるとか、地震の前に鯰が暴れるとか言いますけど、私はネズミでしょうか。ナマズでしょうか(笑)。無意識に始めていました。そこで書き始めていなかったら、あの震災の日から始めようとは、とても思いつかなかったですよね。たまたま十日間ぐらいやっていたので、その続きでできたんだと思います。

細見　不思議ですね。それこそが菅原克己からの宿題ですよね。毎日書くというだけじゃなくて、三月の頭から、ちょうど震災にぶちあたるところで何か詩を書き続けなさいというような巡り合わせ。詩が書けるときは続けて書くときがあったりしたんですけど、僕は絶対毎日書こうとかというのはしたことないですね。だから、宮内さんがご本に書きとめてられるように、せめて机に座る、ノートを開く、一行でも書いてみるという菅原さんの勧めは大事なんだろうなと思いました。それで三月二日ぐらいでしたか、始められたのは。

宮内　はい。

細見　あのとき何があったかを振り返るときに、詩はすごく大事ですね。散文で正確に記録を残しておくことも大事でしょうけど、なかなかその真っ只中で正確な散文は逆に書けないじゃないですか。宮内さんの場合、詩の言葉で、ある程度限られた字数で、そのときの大事な心の震えとかがきちんと残されているという感じがしました。

宮内　いま自分で読み返してみても、ああ、こうだったなぁ……と臨場感があり、当時のほかのことも思い出しますね。沖縄の詩誌「ＫＡＮＡ」に入れていただいたとき、高良勉さんから、毎号エッセイ一本、詩を三篇は書いてくださいと言われて。忠実にそれを守りました。それで、私にとって第一回目に載せてもらったのが「日にひとつの詩 2011 菅原克己からの宿題」でした。それから真久田さんのことや、震災後の福島を訪ねたこと

など、書いていきました。この三年間コロナで、なかなか外にも出られず人にも会えなくて。母も、親しい人も亡くなってしまい……とても悲しい思いをしました。死というものをひしひしと感じてしまうことがあって、たいせつな記憶、記録として何か残しておきたいという思いが強く湧いて、「KANA」に書いたエッセイをまとめておこうと思いました。震災、福島、沖縄……そのひとつひとつが菅原克己という、私にとって心の核のようなものとつながっているように感じられ、まとめられるのではないかと。

「たいせつなあの島」

細見　真久田さんは一方でものすごい硬派の運動家ですね。沖縄問題で、衆議院で爆竹を鳴らして逮捕され、その裁判で一貫して沖縄語で語り続けた。そういう硬派な社会運動家が菅原克己の詩「マクシム」が大好きだった。「びーぐる」という詩の雑誌を四人でやっていて、季刊ですけれど、三年ぐらい前かな、僕の編集担当のときに菅原克己特集をしたんです。

宮内　はい。うれしかったです。細見先生のご担当でしたか。

細見　そうすると、高階杞一さんが「マクシム」の話をしている。僕らよりちょっと上の世代だと、「マクシム」がずいぶん深く入っている。僕らくらいになると、高田渡の「ブラザー軒」になっちゃう。あれもいい詩ですね。そういう菅原克己さんの広がりがありますね。

宮内　げんげ忌に高田渡さんが来て歌ってくれたこともありました。「ブラザー軒」が入口で山川直人さんが菅原克己の詩を漫画化してくれたり、最近では佐久間順平さんが「美しい夏」をCDにしてくれて。没後三十年たっても広がっています。七〇年前後に闘っていた人たちにとっては「マクシム」は、苦しいときに励ましてくれる詩だったのだと思いますね。真久田さんの場合は、その人生に伴走していたような詩だったと。

細見　世代的には真久田さんは宮内さんよりはちょっと上ですね。いわゆる団塊世代。男性の場合、山田兼士さんなんかそうですけど、自分たちは団塊世代ではないということを強く言う。団塊世代は、山田さんからすると、やっぱり四七、四八、四九年生れまで。五十年からは違うんだという（笑）。

宮内　私も「私は団塊世代じゃありません」と言いたい感じありますね（笑）。

細見　やっぱりそういう感覚ありますか。

宮内　いや、十把一絡げにされているようで、ちょっと……という。

細見　同時に山田さんなんかの感覚でいくと、自分たちよりちょっと上の団塊世代が一つのカルチャーを持っていて、自分たちはそこに入れないし、弾かれる、違う形のことを始めたかったという感覚なんですね。そのへんは宮内さんはむしろそこはつながっているのかなと思ったりしたんですけど。

宮内　そうですね。カウンターカルチャー世代の終わり頃の感じですね。私家版の詩集を出した七〇年は、新宿がフォークゲリラなどで盛り上がった翌年で、あの騒乱が過去の栄光というか、失われた時代というか……でもその残り香がまだ漂っているというような空気でした。

細見　七二年というと、ちょうど連合赤軍事件でしょう。七四年あたりになると今度は爆弾闘争ですね。そういう意味で左翼運動、新左翼系の運動が一気に後退してしまう時期ですね。僕はそのときのことを肌で知っているわけじゃないんですけれど、後から考えるとそんな感じがします。

宮内　あさま山荘事件があって、闘う学生たちを応援してくれていた人たちの気持ちが急に冷めてしまったところがあったし、その後精神世界の風潮が盛り上がったけれど、今度はオウム真理教の事件でそれも潰えてしまって……というように、何か潮流が起こっても

消されてゆくというふうで、さみしいですね。

細見　何もかもがなくなってゆく気がしますね。オウムの世代の幹部はだいたい僕の同世代です。

宮内　そうですか。学生運動などの後の、精神世界、ライアル・ワトソンの『生命潮流』とかの流れですね。

細見　公安関係の、警察の方が言っていたのは、六〇年安保はわりと政治経済学部の学生が中心だった。七〇年前後の学生運動では、文学部の学生が中心。美学とか一種の芸術的な志向が強かった。それが今度、オウムになると、理学部、工学部、あるいは医学部。理工系が熱中していた。こんな具合に世の中が変遷している。警察の方がそんなことを言ったりしている。

宮内　おもしろい見解ですね。七〇年前後の芸術系はまさしく私にもあてはまるようです。警察の中でもシャープなかたには、世の中の実情が評論家たちよりもクールに見えているところがあるでしょうね。

細見　具体的に現場と接点を持ちながらの仕事ですからね。だけど、可能性というか、オルタナティブなありかたがその都度潰されていく感じがありますね。沖縄はそういう意味で宮内さんから見るとある種のオルタナティブなところはあったのでしょうか。

宮内　そうですね……沖縄にはもともと強い憧れがありましたが、より惹かれていったかもしれません。深い祈りの祭祀とか、伝統文化などに心揺さぶられ、自然も楽園のように素晴らしいのに、基地の問題が目の前に、生活のすぐ横にあって、上空には戦闘機が飛んでいる。「ＫＡＮＡ」の高良勉さんたちは、そのまっただ中で、辺野古にも座り込みしながら書いているので、緊迫感が違い、畏敬しています。現在は尖閣の問題で、石垣島辺りにも頻繁に中国船が来て、自衛隊基地が作られて。私、八重洋一郎さんの詩もすごく好きで、詩集を出すたびなどに八重さんと文通していて、ひそかに仲よしのつもりですけれど、八重さんのあの厳しさ。あんなに碩学で、あんなに芸術的で、やさしい人をあそこまで怒らせてしまうのか、という辛さがあります。

細見　僕も八重さんが小野賞を受賞されて、その後、「びーぐる」でのやりとりもあって、「びーぐる」に連載してもらったりしたんです。石垣島から、日本と沖縄の関係をずっと見ている感じですね。『日毒』っていう詩集もありました。

宮内　あれは本当にショックでした。日毒人である私は頭を下げるしかない。加害者は自分の罪を忘れやすいことを自戒して生きてゆきたいと思いました。八重さんには良いエッセイ集もありますよね。

細見　『若夏の独奏（ソロ）』。

宮内　素晴らしいですよね。大好きです。

インドを実際に訪れて

細見　インドの話がありましたけど、このあいだいただいた詩集で、今度は実際にインドに行かれたということですね。それで、どうでした？　そこに実際に行ってみたら、僕も三度ぐらい行ったのですけど。

宮内　ほんとうにもうインドが好きで。『大地のうた』を観た後で、彼と出会って、彼の口説き文句が、「いっしょにインドに行こう」だった（笑）。それが三十年ぐらい行けなくて。もう私はそういうカルマ（業）なのかなと思い始めたころに、やっと行けました。

細見　今はコルカタというカルカッタとか、デリーとかそういうところですか。

宮内　ガンジス川沿いの聖地、ベナレスに長くいました。長年行きたかったところで、しばらく滞在し、その後も再訪して書いたのが『マー・ガンガー』という詩集です。その後宮内がマハトマ・ガンジーをテーマにした小説を書くための取材にも同行しました。目的がある旅は、思いもかけない出会いもあり、それはそれですごく面白いですね。

細見　僕が行ったのも一応、調査旅行でした。

宮内　なんの調査ですか？

細見　ユダヤ人の離散状況の調査で、コーチンという南のほうの町がありますね、あそこにはいわゆる教会堂、シナゴーグがあって、コミュニティがあるんです。コーチンだけじゃなくて、コルカタとかにも行きました。そこにはサッスーンという一族がいて、いわゆるセファルディ系のユダヤ人ですけれど、南インドに電気のインフラを走らせたり、いろんな事業をしたわけです。

宮内　私が一番最近、四年前に行ったのがムンバイからコーチンで、南インドを回りました。コーチンのあたりには、きれいな明るいパステルカラーのキリスト教会がいっぱいありましたが、シナゴーグもあったんですね。

細見　インドは本当に言葉も多様だし、とにかく広いし、北と南でまた全然違うし、僕もまだ、インドは全然わからない。僕が行っていたのは二〇〇〇年前後でした。もう二十年ほど前ですね。

宮内　インドの人に会うと、町のお店や食堂にいる普通のおじさん、おばさんでも、こちらの精神的、霊的な度合いを見られているような気がします。私の持っている物質的、金銭的価値ではなくて。そんなインドの人たちが好きなんだと思います。信仰心だけではなくて、生まれ持っている霊性というか。もちろんどこにでも泥棒も雲助もいるんですが。

細見　それこそインド映画には独特なのがあるし、長いですよね。それから音楽も独特ですね。確かに、非常に独自な奥深さがあるような感じです。

宮内　インドの人たちは好奇心も旺盛で。

細見　一方でヒッピーブームメントとしてのインドというのもあって、たぶん宮内さんらのところまで続いていますよね。

宮内　ビートルズのインド熱もあって。当時世界中でさまざまなグル（導師）の本が出版され、玉石混淆でキワモノも多かったかもしれませんが、そんな中に、あるヨガ行者の自叙伝があり、ふつうの暮らしを誠実にこなしながら、霊性を高める修行をするという姿に感動しました。菅原克己が「自分に正直に」と言ったように、精神性の高さを基準にして生きるということに惹かれました。

細見　現実の政治はこれからインドと中国がどうなるとか、ロシアがどうなるとかけっこうややこしいと思いますけど、そういう精神性のところって大きいでしょうね。インドのそういう精神性、じっくり考えたいですね。勝典さんの作品で『焼身』だと、あれはベトナムですけれど、ああいう僧侶の話とか、ちょっと信じられない精神性ですね。

宮内　私たちになじみのある、日本のお寺に感じているものとは全く違う仏教があるのですね。ベトナムに行って、焼身自殺したティック・クアン・ドゥック師を訪ねて紆余曲折に歩く途中に、焼身供養塔がありました。するとそこには世界的にも有名なクアン・ドゥック師だけでなく、焼身した大勢の僧の写真が祀られていたんです。中にはまだ若い青年僧や、十代の少女のような尼僧たちも何十人もいて……「焼身」がごく最近でも行われていることにも衝撃を受けました。

細見　そのときは勝典さんと一緒に旅されていたんですね。

宮内　そうです。出かける前は情報もほとんどなくて、手探りの取材旅行でしたが、目の前の見えない透明な自動ドアが次つぎに開いてくれるような、奇跡的な体験でした。

文芸一家の暮らし

細見　どうしても悠介さんのことを含めて、宮内一家はどんなふうになっているのかなと思ってしまいます。親子、夫婦間で、特に文学の話とか、されるわけですか。

宮内　けっこうしています。先日も新聞社の方に、むしろ避けて日常的なお話しかされないかと……と言われましたが、わりと日常的に文学の話もしています。特に勝典は小説を書くときにものすごく考えるので、それをだ

れかに話すことによって整理できたり、方向性が明確になったり、発展させられたりということがあるらしく、私はよく聞き役をさせられています。ときには私も集中したいことがあって、曖昧な返事していると、彼が怒り出したりして（笑）。

細見　お互いに作品は読み合っていますか？

宮内　私はもちろん勝典の第一の読者です。彼も私のものを読んでくれています。息子も彼のものをよく読んでいて、「ぼくはお父さんの小説がいちばん好きだ」と言ってくれています。本人には話してないようですけど。もちろん宮内は、息子の書いたものは読んで感想を言ったりしているようです。悠介がデビューするときは、大学入学以来十数年ぶりに会社を辞めて帰宅していたときで。心療内科に通うような体調に苦しみながらも、ものすごい勢いで次々に書いては私に見せてくれて。「いいよ！　すごい！　面白い！」と言って（笑）、いちばんはじめに読ませてもらって幸せでした。ちょっと意見も言わせてもらったり。息子にしてみれば久しぶりの親孝行のつもりだったんでしょうね。それが溜まって本になったので、とても幸運でした。

細見　よかったですよね。

宮内　デビュー前は、悠介は悠介で、「絶対にお父さんの世話にはならない！」と、会社勤めしながら書いたものをあちこちに応募していましたし、彼は彼で、「悠介には絶対に手を差しのべない。自力で土俵に上がってくるのを待っている」と父子でがんばっていて……（笑）。ですからわりと最近まで、悠介には親子関係はなるべく黙っていてほしいと言われていましたが。でももう、みなさんご存知のようなのでお話ししてもいいかなと。かつて新宿の路上で出会ったときは無職の作家志望だった勝典も、作家になれましたし、こんどは悠介も作家になれて、ジャンル横断的に活躍してくれていて、ほんとうにありがたいです。それから息子の奥さん、Ｐｉｐｐｏのこと、ご存知ですか？　以前、詩の出版社で働いていて、菅原克己の詩を英訳しているアーサー・ビナードさんの詩集の編集も手伝ったそうです。退職後は近代詩伝道師と名乗ってポエトリーカフェを開いて、活動しています。文芸一家ですね、私たち。気づけば。

細見　こういうややこしい時代、コロナがあって、戦争があってという状況のなかで、文学がどういうことを言えるのか、と思うんですね。こういう状況だからこそ大事な文学が書かれているのでは、とも思うのですが。

宮内　一体どれだけ読んでもらえるのか、とも思いますね。彼らの小説にしても、詩にしても。でも、どんなにテクノロジーが発達しても、言語で生きている私たちにとって、文学、特に詩は、私たちの心にとって必要なものだと思います。だからこそ、それにかなうだけの意味のある、深い、いいものを書いてほしいですし、私も書いていきたいです。

細見　現に書かれていることが大事ということもあるじゃないですか。もちろん読まれてなんぼというところもあるんですけど、でもそれが書いてあるということの大事さがあると思います。もちろんそれがたくさんの人に読まれたらいいんですけど。でも、それこそ極端な場合ソ連とか、今のロシアでもそうかもしれないし、中国でもそういう事態がはっきりあると思いますけど、書けないことがあったじゃないですか。あるいは書いても公表できないことがありますね。検閲されるとか、そういうのを書いていたら逮捕されるとか、そういうことだってあるわけで、それからすると現に書いてあるということ、事実誰かがそれを書いたということで、既にいちばん大事なところはクリアされているという気がします。

宮内　細見さんが訳されているポーランドのイツハク・カツェネルソン、結局アウシュヴィッツで殺されてしまったわけですけれども、彼の作品もああいうふうに書かれているからこそ残ったんですよね。